

# スウェーデンボルグの「再生の心理学」

高橋和夫\*

## Swedenborg's "Psychology of Regeneration"

Kazuo Takahashi

**要 旨** エマヌエル・スウェーデンボルグは、およそ55歳のとき、科学者から神学者に転身した著名な神秘主義思想家である。彼の聖書解釈である最初の神学著作『天界の秘密』は、以後の神学・宗教思想の基礎をすえたものである。それは膨大な書物であるが、本稿の目的は、このうちでも「創世記」冒頭（とくに第1・2章）での彼による解釈に焦点を絞り、それを彼独自の「再生の心理学」として捉え直すことにある。「再生」とはキリスト教的な新生や聖化を意味するが、彼の立場はこうした神学的教理よりも、むしろ現代の「自己の全体性の統合」や「自己実現」を扱う心理学派の考えに近接するものである。彼の聖書解釈は、字義や歴史的意味の背後に、内なる霊的意味を探る試みである。彼は「創世記」の中に、科学的・歴史的・比較宗教学的・文献学的な捉え方を超えて、人間の精神が普遍的にたどる漸次的な成長過程を主題とする、古代のいわば「宗教心理学」を読み取ろうとした。本稿では、他の聖書解釈や近世・近代の哲学の人間理解とも対比させつつ、スウェーデンボルグの思想の独自性を浮彫にしたい。

### 問題の所在

エマヌエル・スウェーデンボルグ(Emanuel Swedenborg, 1688—1772)は18世紀のスウェーデンの科学者・神秘主義思想家である。およそ55歳のとき、彼はそれまでの科学研究を放棄して、聖書をヘブル・ギリシアの原典で学びつつ、いわゆる心霊的な世界を集中的に探求しはじめた。

従来の解釈は、スウェーデンボルグのこうした謎めいた転身を否定的に捉え、科学者としても神秘的思想家としても、中途半端な思想しか残さなかった、というものであり、彼の思想の首尾一貫性を論証する試みは余りなされなかったと言えよう。

しかし1988年に彼の生誕300年を迎えてからは、さまざまな学問の分野で彼の科学・哲学・神学を見直そうとする動きが活発になり、膨大な論文集が出版されたり<sup>1)</sup>、ノーベル医学・生

理学賞を受賞したエックルズ卿などを招いた国際シンポジウムもニューヨークで開催された<sup>2)</sup>。これらの活動によって、スウェーデンボルグの思想が現代でもなお、文学・哲学・神学・芸術・医学・科学思想などの多分野に影響を及ぼし続けている事実が明らかにされつつある。

本稿の目的は、スウェーデンボルグの最初の神学的著作、『天界の秘密』(*Arcana Coelestia*, 1749—1756)に論述されている膨大な旧約聖書の釈義のうち、その冒頭でなされる「創世記」の天地創成神話の解釈をめぐる諸問題を取り上げ、スウェーデンボルグの思想の「現代性」を「再生の心理学」として捉え直すことにある。「現代性」というのは、その解釈が旧来のキリスト教的な解釈の枠を超え、いわば普遍的宗教の視座からなされ、それが現代のユング心理学や他の「自己実現」の心理学にも通底する、という意味である。

聖書解釈——とくにその創成神話の解釈は、正統的な神学・比較宗教学・文化人類学などさ

\* 本学教授 哲学

さまざまな分野からのアプローチがあるが、それらはいずれも哲学的・心理学的な考察において、今一步物足りなさを感じざるをえない。スウェーデンボルグの解釈は、これらのアプローチとは異なり、彼独自の解釈の地平を切り拓いたものである。

## I 「再生の心理学」としての 旧約聖書解釈

『天界の秘密』はスウェーデンボルグが神学者に転身してから最初に出版した、「創世記」と「出エジプト記」の全章にわたる膨大な釈義書であり、それはラテン語で書かれ7年をかけてロンドンで出版された。この書は同時代者であった若きカントやゲーテによっても読まれ、カントは有名なスウェーデンボルグを批判する著作、『視霊者の夢』(Träume eines Geistersehers, 1766)を書いている。

『天界の秘密』は厳密には聖書神学に属する、彼独自の宗教思想による聖書解釈の書物である。この書は彼のそれ以後16年にわたって執筆された、大小の神学著作群の基礎をすえたものである。ここで扱われる根本的な主題の一つは、人間の「再生の心理学」である。この「心理学」は旧約聖書全体のより大きな主題たる、救世主の受肉の過程を扱う「<sup>ドロフ・イ・ケイション</sup>栄光化の心理学」とパラレルな関係に立つが、本稿では問題の焦点を分散させないために後者については論じない。

「再生」(regeneration)とは、キリスト教でいう新生とか聖化という概念に近く、いわゆる輪廻りんねのような、肉体の死後の生まれ変わりを意味するものではけっしてない。しかしスウェーデンボルグの再生の概念は、福音主義者やフンダメンタリス根本主義者が漠然と信じているような、最後の審判しはんのときに墓から甦よみがえって天国へ入ってゆく身体といった神話とも、また、神秘的な贖罪思想と結びついた「信仰」によってたちどころにして「原罪」から浄められる、人間の聖化された霊性とも関係しない。

現代では、単なる個人的な精神的成長の過程だけでなく、無意識やさらに集合的無意識の意識化による自己統合や自己実現の過程をも研究対象とする心理学が広く受け容れられている。スウェーデンボルグはフロイトやユングの生まれる以前の18世紀半ばに、すでに無意識とか元型といった概念にきわめて近い、心理学的な基礎概念を、彼の「再生の心理学」において把握していたと言えよう。このことは本稿の論考が進むにつれて明らかにされる。

スウェーデンボルグは、「再生」という精神の成長過程は、程度の差はあっても、人間であれば誰もが普遍的にたどる精神の発達段階である、と説いている。彼の前提は、人間は人間として生まれるというよりも、人間は人間になってゆく過程である、というものである。それは、人間が外なる道と言われる感覚経験や知識の獲得によって徐々にのみ自己を実現してゆく、という意味である。こうした過程に関してスウェーデンボルグ自身が論じているところを引用しよう。

人間はその幼少の時期から児童期に至るまでも単に感覚的であるにすぎない。なぜなら彼はそのとき身体からだの感覚をとおして地的・身体的・世俗的なものしか受けないからである。こうしたものから彼の観念や思考がそのとき形成されるが、内的な人との交流はまだ開かれない。あるいは、単に彼がこうした世俗的なものを把握し保持しうる範囲内で開かれるにすぎない。そのとき彼が有する無垢は外なるものにすぎず、内なるものではない。なぜなら本当の無垢は知恵の中に宿るからである。……児童期から青年期にかけて、両親や教師から教えられるだけでなく……民法の要求することや尊いことを学ぶことにより、内的な自然的なものとの交流が開かれる。そして青年期から成年初期にかけて、社会的・道徳的な生活の諸真理や諸善を学ぶことにより、とくに聖言を聞いたり読んだりすることをおして霊的な生命の諸真理や諸善を学ぶ

ことにより、自然的なものと合理的なものとのあいだに交流が開かれる。しかしその青年がそのとき真理によって善に浸透するに依りて、つまりその学んだ真理を実行するに依りて、合理的なものが開かれるのに反し、真理によって善に浸透しなければ、つまり真理を実行しなければ、合理的なものは開かれない。それでもその学んだ知識そのものは自然的なものの中に、すなわちその記憶内にそのまま残っており、したがっていわば家の外側の入口に残っている。……しかし彼がその後の人生で善や真理を無視し、それらを否定し、それらに反したことを為すに依りて……合理的なものは閉じられ、また内的な自然的なものも閉じられてしまう。……自分自身が再生することに甘んじる人びとのものにはその反対のことが起こるようになる。なぜなら徐々にかつ連続的に合理的なものが彼らのうちに開かれ、これに内的な自然的なものが服従し、さらにこの内的な自然的なものに外的な自然なものが服従するからである。……こうしたことは……人間の晩年に至るまでも起こり、そののち天界で永遠に起こるのである<sup>3)</sup>。

このようにスウェーデンボルグによれば、特定の宗教とか信仰を引き合いに出さなくとも、われわれが倫理的・社会的にそれなりの健全性をもって、何が正しく善いかを知るだけでなく、その知ったことを実践すれば、徐々に内なるものを開く、つまり内なるものを意識化して自らの精神を成長させることができるのである。こうしたいわば普遍的な倫理学を基礎に置くスウェーデンボルグの再生観は、道徳法則との一致をめざしての無限の道徳的前進を要求するカントの倫理学を思わせるし、また、自己の統合、自己の全体性の実現を志向するユング心理学にも通じている<sup>4)</sup>。しかしスウェーデンボルグの独自性は、時代的背景もあるとはいえ、キリスト教という伝統的な宗教そのものもつ信仰観や贖罪観の原理的な批判と再解釈によっ

て、こうした考え方を導き出した点にある。

彼においては、人間の再生の過程は、万人の靈魂の根源に刻印されている受肉した神の再生の過程——つまり「<sup>グロリアフィケーション</sup>栄光化の過程」とパラレルである。だから彼の説く信仰は、正統的な信仰とされている、いわゆる代理贖罪や信仰のみによる義認の教理とはまったく無縁のものである。それは、原型としてのイエスの生きざまを見倣う、実存的な倫理的な努力を意味する信仰である。しかもスウェーデンボルグによれば、人間に普遍的に起こるこの再生の全過程を、象徴をとおして宗教的に叙述したものが、「創世記」冒頭の天地創成神話なのである。

## II 天地創成神話に内蔵された意味

周知のように、「創世記」の第1章には神による六日間の宇宙創造神話が語られている。古来その解釈は千差万別であって、その神話は科学（とくに地質学）と一致するとか、神的創造を比喩的・象徴的に述べたものであるとか、あるいはバビロニアや他の古い神話の焼き直しにすぎない——等々と、論争は果てしもなく続いている。

スウェーデンボルグはその後半生を神学者として過ごしたが、厳密には彼は聖書神学者であった。彼はほぼ全聖書にわたる膨大な解釈を試みたが、その予備的研究、すなわち、ヘブル・ギリシア語のみならず聖書の地誌的・歴史的な側面的研究にも長い年月を費している<sup>5)</sup>。むしろそのことを実証する遺稿も残されており、それは『天界の秘密』（全8巻）とほぼ同頁の旧約聖書の積義書、『アドヴァーサリア』（*Adversaria*）である<sup>6)</sup>。いずれにせよ彼の聖書研究は、その後半生の初期に集中的になされたものとはいえ、実に徹底したものだだったのである。

さて、ここでは天地創成神話を中心にして、彼の聖書解釈上の諸問題を考察しよう。

彼によれば、「創世記」の第11章までは、最も古い時代の人類の霊的な文化の遺産であり、モーセが記したものではなく、古代のヘブライ

民族にすでに伝承されていた一連の神話である。そしてそれは、古代のありふれた宗教的な文体で書かれた「聖言」の一つであるという。この「聖言」という概念は彼独自のものである。それは、自然界の事物や歴史的事件を素材として精神的・霊的な真理を叙述する古代の表現様式に基づいて書かれた宗教的文書を意味している<sup>7)</sup>。スウェーデンボルグの思想を特徴づけるものとして知られている「対応」(correspondence)の概念は、まさにこの「聖言」と深いつながりを有する。彼によれば、自然界は精神的・霊的世界の複製であり、両界は「対応」の原理によって結びついている。それで、もし何らかの精神的・霊的な真理が存在するならば、その真理は自然界の事物をとおして表象されるであろう。このようにして古代人によって表現された宗教的・道徳的な知恵が「聖言」とよばれるものである。

「創世記」の創成神話が科学と一致するかどうかという議論がいつもなされてきたが、スウェーデンボルグも初期の頃は、敬虔なキリスト教の科学者として創成神話を何とか科学と調和させようとしている。しかし彼が夢や神話や聖書の研究によって「対応の理説」を確立してからは、聖言にはその字義に内蔵された精神的・霊的な内なる意味があることを確信するようになった。それゆえ彼は、創成神話の解明のさいには科学との比較といったことをいっさい取り上げていない。創成神話は古代の著者が自分の未熟な科学的知識を援用してその宗教的確信を述べようとしたものではなく、光・水・天体・動植物といった自然界の現象を表現のための素材として単に利用しただけである。古代の聖書記者の意図がもっぱら宗教的・精神的な真実を明らかにすることにあつたのなら、創成神話を地質学や進化論と比較すること自体、無意味であろう。宗教は科学とちがって、人間の心や靈魂、あるいは人間の生き方に関係するものだからである。

こうした議論とは別に、聖書解釈にはもう一つ重要な問題がある。それはアストリクやア

イヒホルンに始まる、いわゆる聖書の「高層批評」である。彼らは「創世記」がJ典・E典・P典といったバラバラな資料を寄せ集めたものだ<sup>8)</sup>と指摘している。スウェーデンボルグはこうした立場を採らず、厳密な「対応」にしたがって記された「聖言」には高度な統一性と完結性があると考え、このことを実際にその聖書解釈によって論証してみせたのである。

一般に聖書解釈は長い伝統を有しており、たとえばアウグスティヌスは、聖書の本文がもつ「意味」を大略次のように分類している<sup>9)</sup>。

- 字義の意味 (sensus literalis) ないし歴史の意味 (sensus historicus)……記されている文字どおりの意味
- 霊の意味 (sensus spiritualis) ないし神秘的意味 (sensus mysticus)……記されている文字の奥にある意味、つまり文字の奥にある霊的な意味

霊の意味はさらに次表のように分類される。

- 原因論の意味 (sensus aetiologicus)
- 類比的意味 (sensus analogicus)
- 寓意的意味 (sensus allegoricus)

なお、こうしたアウグスティヌスが分類した「意味」は古代・中世を通じてさまざまな仕方で広く採用されてきたが、字義の意味は肉の意味 (sensus carnes) とよばれるし、また霊の意味は道徳の意味 (sensus moralis)、上昇の意味 (sensus anagogicus)、比喩の意味 (sensus tropologicus) とよばれる<sup>9)</sup>。

スウェーデンボルグ自身、その聖書解釈においてこうしたさまざまな「意味」を熟知し、実際にもこうした言葉のいくつかを使っている。しかし、創成神話(「創世記」1・2章)だけでなく、「創世記」や「出エジプト記」の全体をも、人間の再生に関わる最古の「心理学」だと

考えた点で、彼の聖書解釈は異彩を放っている。

以下、七日間の天地創成神話に内蔵された意味を、スウェーデンボルグとともに探求してみよう。

### Ⅲ 虚無の深淵と光・水の創造

「創世記」冒頭の、神が最初に創造した「天」と「地」は、われわれが見上げる空や、下に踏みしめる大地のことではない。「天」はスウェーデンボルグが「内なる人」とか「霊的な心」とよぶ、必ずしも意識化はなされないが人間が生来的にもっている霊性や宗教性を意味し、「地」は「外なる人」とか「自然的な心」とよばれる、人間の世俗的・非宗教的な意識を意味する。「天」は、人間を真に人間たらしめる根源的な善の素質である。しかし、スウェーデンボルグによれば、人間はまた悪へも生まれついている。悪といっても、彼はそれがいわゆる原罪に由来するとは考えない。人間が悪へ生まれついているということは、教義や教理から導き出される説明ではなく、彼にとっては一つの経験的な事実である。だから彼は、人間の悪性の起源を原罪の教理に求めず、自己愛（自己中心性）と世俗愛（物欲・名誉欲・金銭欲）に求める。つまり、人間が自然にもつ意識は生まれつきこうした悪に汚染されているというものである。人間が善の根を有しながらも悪へも傾いているという考え方は、人間性の本質的な構成要素を「合理性」と「自由性」と規定する彼の神学的前提から必然的に生まれた結論である。われわれは「自らの未成年状態から脱し」<sup>10)</sup> できていない、自己中心的な人間、感覚的なものに惑溺した人間、単なる知識へ偏向した人間を知っているが、彼らはその自然的状態から抜け出して精神性を開発するところまで未だ達していないのである。それゆえそうした自然性・世俗性は、宗教的視座からは、「地は形なく、むなく、やみが淵のおもてにある」<sup>11)</sup> 状態なのである。

スウェーデンボルグは創造の七日間ないし七期間を、人間の再生の連続的な七段階の過程と解釈するが、今述べられた段階はこれに先立つ、人間が再生する以前の状態である。この状態においても「神の霊」——これを現代の心理学の一派に倣って「宇宙の超個的な中核」<sup>12)</sup> と考えてもかまわない——が「水のおもてをおおっていた」。つまりここに、人間の救いに対する究極的な保証・根拠が示唆されるのである。スウェーデンボルグはこの一節を説明して、「めんどりが翼の下にそのひなを集めるように」<sup>13)</sup> 再生以前の人間を覆っている神的慈悲の働きがここで意味されている、と言う<sup>14)</sup>。

さてこれに続くのは、第1章3節の「神は『光あれ』と言われた。すると光があった」という、光の創造である。光が象徴するものが、内なる照明・無意識的なものの意識化・悟性や理性の開発——等々であることはよく知られているが、再生の初めの過程では、それまで隠れていた根源的な善性、すなわち宗教性・霊性とよびうるものがようやく自覚され、この自覚が自己性や世俗性を後退させる。それが「光と闇」の分離である<sup>15)</sup>。自然状態ではそれなりに生きてはいたものの、霊的にはほとんど死に瀕していた虚無の魂に、神的な一条の光が射しそめたのである。

スウェーデンボルグは、こうした一種の宗教的な平安の状態がとくに不幸・悲哀・試練・病気のときによく起こるが、それはそのとき、人間の表層部にある、身体や世俗に関わる意識が静止し、いわば死んだものようになるからだ、と説明する<sup>16)</sup>。このとき心の奥底にある「内なるもの」として自覚されるのは、人間が幼少の頃から「痕跡」(reliquiae, remains)として無意識のまま蓄えてきた、善・愛・無垢といった内的な情愛である<sup>17)</sup>。幼児のまわりには天国がある、と詩人はうたったが、われわれが苦しみや悲しみのさいに幼い頃への郷愁にかられ、一種の清浄で敬虔な情緒をもつことがあるのは、こうした「痕跡」が神によって人間の中に「内的な記憶」として蓄えられるからだ、

とスウェーデンボルグはいう<sup>18)</sup>。

創造の二日目は「水」が主題であるが、スウェーデンボルグは聖書全体にわたって、水を理解力や知性に関わるものと一貫して解している。「水の真中に天とよばれる拡がりがある、その拡がりによって水が上下に分けられた<sup>19)</sup>」という聖書の節は何を意味するのだろうか。

再生のこの段階では「痕跡」すなわち内的な情愛の意識化が主題となる。この内的な情愛を意識にもたらずのは、「拡がり」によって意味される「合理的なもの」である。スウェーデンボルグが使う「合理的なもの」(the rational)という概念は、いわゆる理性そのもののことではなく、「自然的なもの」(the natural)と「霊的なもの」(the spiritual)との中間にある、人間の啓発的な知性的機能全体を指す<sup>20)</sup>。「水」を上下に分ける「天」とよばれる「拡がり」とは、自己性・世俗性と宗教性・霊性という、いわば心の二重性を認知する、この啓発的な知性機能のことである。再生以前の状態では、聖と俗は峻別されず、合理的なもの、すなわち合理性の能力が光によって照らし出されてはじめて、人間は自分の自然性である低次の自我から、それを超えた内なる高次の自己を区別できるようになる。

「天」とよばれる合理的な能力を、スウェーデンボルグは、デカルト以降のいわゆる近代的自我を支える理性そのものとは見做さない。そうした理性は「合理的なもの」の一部を形成する要素たるにとどまり、しかもそれは、靈魂と総称しうる最内奥の霊的な「度」<sup>21)</sup>と、感覚や経験に由来する自然的な「度」との間隙に存在するために、「混成された知性」<sup>22)</sup>とよばれている。

外なる低次の心に固有なものは、人間が幼児のときから家庭や学校で学ぶ、感覚や記憶に由来する知識であり、身体の維持や社会生活に必要な知識であって、これは理性の下方にあり、その統制を受ける。これが「拡がりの下の水」が意味するものである。一方、「拡がりの上の水」とは、理性の上方から理性に流入する霊的

・宗教的な知識、つまり啓示的なものを意味する。スウェーデンボルグはこれを「霊的な心」に属する「善と真理」であるともいう。これは理性の上方ないし内部にあり、人間の自然性・自己中心性・世俗性を超越しているとはいえ、理性に反するものではない。健全な理性であれば、それ自身の限界をきちんと認め、自らを超越するものに畏怖の念を抱くのである。

さて次に、「下の水」がやがて海と地とに分けられ、その地に植物が生成するプロセスが続く<sup>23)</sup>。「地」は理性的な思考や内省によって外なる心の中に徐々に集積される宗教的な知識を意味し、これを土台にして、やがてここから宗教的で霊的な生活が始まるのである。しかしこの節では、宗教的な生活の初期に起こる人間の一般的な心理状態が描出されているという<sup>24)</sup>。何らかの宗教的信仰や信念を得ると、人はまず宗教教義の教える本来の内容をまだ十分に咀嚼しないまま、何とかその教えどおりに語ったり行動したりしようとするものである。そこには一種の強制感や義務感が必然的に伴い、行動はごちない荒削りなものになりがちである。こうした過程で人は自己愛・世俗愛とそれに反する「隣人への愛」・「真理への愛」との葛藤のうちに置かれ、したがって、そこから生み出されるものは、後に出てくる動物のような、生きいきとした善ではなく、「やわらかい草」にたとえられる幾分未熟な善である<sup>25)</sup>。

スウェーデンボルグは宗教的信仰の内面的な深化の過程を、次のように図式化してみせる<sup>26)</sup>。

「単なる知識の信仰である、記憶の信仰」

↓

「理知的な信仰である、理解力の中の信仰」

↓

「愛の信仰ないし救う信仰である、心情のうちにある信仰」

#### Ⅳ 二つの光体と動物の創造

再生の第四の状態に対応する創造の四日目に、神は二つの光体と、星を創造した。スウェーデンボルグによれば、再生とは、人間の靈魂の中へ秩序をもって漸次的に神的な生命が浸透してゆく、いわば靈的な創造であり、これこそが聖書記者の書こうとした宗教的思想なのである。神的な生命の流入にしたがって、自己や世俗だけを目的とする肉なる生命は克服される。内なる指示としての義務への忠誠を尽し、試練において己れの低我の衝動を制圧してゆくにつれて、靈魂は神的生命の本質たる愛の熱を実感し、内なる生命の存在を明識しはじめる。

スウェーデンボルグの神は無限の愛そのものであり、神はその無限の知恵を手段として宇宙と人間を創造した。そして人間とは、それ自身生命ではなく、あくまでも生命を受容する器つまり受容体である。再生のこの段階で出現する「大きな光体」<sup>27)</sup>とは、靈魂の内に輝く太陽、すなわち愛である。この愛は、再生しつつある靈魂に実感される、靈的な熱と光である。

しかし、カトリックの神秘主義者、十字架の聖ヨアンネス (Juan de la Cruz) が適切に表現したように、再生途上には「靈魂の暗夜」もまたある<sup>28)</sup>。人はいつも愛に感動してられるわけではなく、しばしば苦悩し孤独の闇をさすらう。それでも暗夜にも、太陽の光を反射する月明かり、すなわち「小さな光体」である「信仰」の明識と確信は奪われないままである。古い自己愛の欲望に引かれる靈的試練のただ中であっても、信仰を堅持する者はいつも希望を失うことはない。信仰の暗夜は真っ暗闇ではないのであり、信仰の月はやはり靈魂の空高く輝いている。

「星」はここでは靈的な知識を意味する、とスウェーデンボルグは言う。恒星は元来、太陽であるけれども、はるか彼方の宇宙からやってくる光であるため月よりも小さく見える。それでも無数の星が暗夜の天空にちりばめられてい

る。星の象徴するものは、どの民族にとっても太古から伝承されている普遍的な靈的知識である、とされる。それは、誰の良心にも流れ入っている、「神は唯一である」・「人間は悪を避け善を為さねばならない」・「盗みや殺人は悪である」等々といったごく基本的な、しかしそれなくしては人間の靈的生活が瓦解するような知識である。神はこうしたものを靈魂のインナー・スペースの中に創造した。再生途上の人間は時には暗夜をさ迷うが、この星の光によってさらに道を進むなら、やがて靈魂の天空に月も昇り、夜が明ければ朝の太陽の赫々たる熱光にも浴することができるのである。

人間が自己中心性や、物質的・感覚的なものへの惑溺を脱し、世俗的な富や名声や権力への執着を捨て、隣人愛をとおして無限愛そのものとしての神への愛に目覚める、精神的な成長過程は、人間が魂の奥深くに、「愛」と「信仰」という二つの「光体」に発する生命的な熱や光を受容することにほかならない。スウェーデンボルグは「愛」を天的原理 (celestial principle)、「信仰」を靈的原理 (spiritual principle) とよぶ<sup>29)</sup>。

天的原理は人間の心の意志的・情緒的レベルに属する、根源的・一次的な要素であり、靈的原理は心の理解力・識別力のレベルに属する、派生的・二次的な要素である。

創造の五日目では、これらの二大原理から靈魂の中へ生きた善や真理が豊かに注ぎ込まれる様子が活写される。神がこのときにまず創造したのは、魚や水辺を這うものや空を飛ぶ鳥である<sup>30)</sup>。これらの意味するものは、宗教的な内省や実践によって獲得された諸知識であり、これらが愛と信仰の原理が浸透してゆく面 (plane) を形成する、とされる。それまでのこうした知識はまだ生きていとは言えない、記憶にのみ属するものだったが、今やそれは愛と信仰によって靈化され生命を帯びるのである。なぜなら太陽の熱光が心の海を射し貫き、この段階まで再生しつつある人間は、より高次でより純粋な原理から行動しはじめるからである。

三日目に創造された植物群とは異なり、ここで生み出されるのは動物であるが、植物が生長という単純な運動しかしない生命であるのに比して、動物ははるかに多様で複雑な生動的な生命をもっている。魚は、外なる自我に浸透してきた、一種の初期的な宗教的情愛の動きを示すが、やがてこれは、陸上生活もできる爬虫類にもなっていく。

実際この聖書の節の記述には進化論との一致が見られる。始祖鳥の存在が突きとめられたように、聖書も字義において、鳥が爬虫類から進化したかのように書いている。もっとも、こうした一致はいつでもよいことであって、太陽や月が出来る以前に植物が出来たのは矛盾だと言えればそれまでである。聖書はそもその意図において宇宙創成を描こうとしたのではなく、人間の魂の普遍的な再生というテーマを論じた、というのがスウェーデンボルグの主張である。

さて這う生物は、イヴを誘惑した蛇もそうだが、スウェーデンボルグにしたがえば、人間の「感覚的思考」一般の象徴である。感覚に密着した思考は多くの錯覚や迷妄をもち、事柄の真偽の判断を誤らせることはよく知られているが、宗教的な面でも事情は変わらない。

スウェーデンボルグの宗教哲学における心や靈魂の概念は、きわめて重層的な構造を有するものとして、デカルトやカントのうちたてた近世・近代の自我の概念——それは「私は考える」という根源的な自己表象に基礎づけられる——をはるかに超出していた。むしろこのことは悪い意味の神秘主義という批判も受けているものの、それでもそれは、現代の心理学のいくつかの学派が主張する無意識や超意識の概念をも含む、広大なインナー・スペースへと拡がるものである。そうした重層的な心において感覚のレベルは最低次元の位置しか占めない。浅薄な思想は眼で見、手で触れるものを確実と見做したり、また愛や信仰を、単なる性的衝動や人類の原始的な恐怖の感情から説明しようとしがちだが、スウェーデンボルグによれば、そうした思想こそ感覚の迷妄や幻想に発するものであ

る<sup>31)</sup>。

また彼の「生命」観には、近世・近代の哲学と大きく異なる根本前提が存している。つまり彼によれば、人間には生命そのものが絶無であり、人間はただ生命を受け容れる受容体ではない。これは近世・近代の自我の特性たる、自我の確実性・自発性を存在論的に否定するものと言わねばならない。だから再生という考え方も、自発的・自律的な意志の道徳的努力だけを強調するものではない。スウェーデンボルグは、人間を再生させる超越的な力——すなわちその愛と慈悲とによって人間を悪しき自然状態から脱出させる神の救済の力——を確信し、この普遍的な力が時代を超えて万人の魂に働きかけていることを、聖書解釈によって証明しようとしたのである。

彼によれば、人間は生命の受容体であるからには、「愛と知恵」ないし「善と真理」を本質とする霊的な生命は、人間を超えた領域から人間に「流入」する。それゆえわれわれが一般に善とか真理とよびならわすものは、その究極的な根源まで突きつめれば、もはやそれらはわれわれ自身のものではなく、与えられたものである。そして実に、この霊的生命の絶対的所与性の洞察と承認こそ再生のメルクマールなのであり、このことを古代の賢人たちはよく知っていた、というのがスウェーデンボルグの主張の核心である。

さて、動物の創造神話には、海中・地上に住む動物や空を飛ぶ鳥が出てくる。「地に這うもの」は、未だ自然的なものに密着している感覚的思考であるが、「鳥」は、そこから高揚され、霊的な大気の中を自由に飛翔する、霊的な思考である。

信仰に目覚め愛を実践しはじめる人びとによくありがちなことだが、彼らは説教や法話を聞いたり宗教書を読んだりして感動を覚えると、そうした感動から性急にも誰彼無しに手あたり次第に説得・伝道しようとするが、これはいわばまだ魚のような未熟な宗教的生活にすぎないだろう。そこには霊的に十分に高揚され純化さ

れた思考や認識が欠落しているからである。霊的な魚や爬虫類は霊的な鳥へと「進化」し、広大な生命的なスペースへと自由に飛び立たねばならない。この霊的進化の過程、つまり現代流に言えば、この霊化とか変容の過程は、「ヤハウェ神が土のちりて人を造り、命の息をその鼻に吹き入れた」結果、「<sup>よけるもの</sup>生霊」になるまで続くのである<sup>32)</sup>。しかしこの完成に至るまでには——これは「創世記」第2章の解釈の先取りである——第1章の最終場面、創造の六日目の段階とその解釈が残されている。

## V 「創世記」第1章における人間の創造

創造の六日目に、いよいよ「人間」が創造のドラマの舞台に登場する。ここで神が人間を神のかたちに似せて造った、しかもそれを「男」と「女」に造ったと語られるさいに<sup>33)</sup>、われわれが留意すべきは、「人間」の霊的・宗教的な概念である。なぜなら「創世記」はあくまでも人間の再生過程の秩序立った進行というテーマを追い続けているからである。

われわれは漠然と「人間」をイメージするが、「人間」に含まれた意味は多様であり重層的である。われわれはまずその肉体を思い浮かべる。そして、肉体は有機的に組織され、生命とよばれる神秘的な力によって生気づけられている、という考えが続く。一人前の人間とは、この意味では健全に機能する肉体の力を具えた人間のことである。しかし知性や教養を伴わねば一人前の人間と言わないこともあるし、また法的にいう成人の概念も道徳的にいうそれも異なってくる。

しかし創造の六日目に語り出される「人間」というのは、知性的・霊的に卓越した最高の宗教的人間——再生の過程においてかなりの程度にまで霊的変容を遂げた人間——を意味しているのは明らかである。

スウェーデンボルグによれば、六日間の創成神話には漸次的になされる自然的な人間から霊的な人間への再創造——再生——が象徴的に叙

述されるが、神が「人間をつくろう」<sup>34)</sup>と言うまでには準備の数多くの段階が存在した。人間自身の内的な試練や苦闘は、それ自体がまた救済者・再生者としての神の労苦でもあった。霊的な再創造は、自然の創造とは異なり、被造物の自由が関与するため、神が人間に働きかけ人間が神に協力してはじめて達成されるものだからである。現代的に言えば、人間の精神的成長、自己の全体性の実現は、個人的な意識を超えた集会的無意識や超<sup>トランスパーソナル</sup>個人的な諸力との協同によってはじめて達成されるのである。スウェーデンボルグ流に語れば、人間が愛の原理から善を意志し、信仰の原理から真理を認知するとき、その人間の外なるものは再生して、内なる秩序に服し、そこに争闘はやみ、平安と静謐が与えられるのである。

それでは、人間を「男と女」に創造したという意味は何であろうか。スウェーデンボルグは人間の心の本質的な構成要素を、「意志」と「理解力」に二分する。「意志」はいわゆる意志も指すが、それはむしろ心の情愛・感情・情動的な側面の総称である。これは根源的なもので愛や善に関係する。「創世記」の記者はその時代の「対応の知識」に基づいて、この側面を「女」とよんだのである。一方、「理解力」は合理性・理性・悟性といった知性に関わる能力であり、これは信仰や真理に関係する。この側面が「男」とよばれるものにほかならない<sup>35)</sup>。

もし宗教が「女」の側面しか発達させないなら、それは感情的なものが突出した熱狂的・狂信的な宗教になるだろうし、「男」の側面しか発達させないなら、抽象的・観念的なものにすぎないだろう。

同様に人間の霊性もまた、これら二要素がバランスよく再生しなければ宗教的なものは何も生まれまいだろう。ユングは感情の機能を知性の機能に対置し、愛や情緒的なものの重要性を認めたり、「内なる異性」——アニマとアニムス——の意識化の必要性を説いたりした。スウェーデンボルグは人間の精神的成長におけるこうした両性の機能の統合の必要性をすでに十分

に知っていた。精神的に成長したバランスのとれた人間とは、知性的でかつ情緒的な人間なのである。だから人間の再生とは、「理解力」と「意志」の統合的な再生であり、前者は真理を見、真理をそのあるがままに理性的に把握することであり、後者は真理を感じ、愛し、意志し、実践することである。愛され実践されて、いわば自発的になった「真理」は、もはや「真理」とよばれず、「善」とよばれる。同じように、「信仰」は、それが「愛」を伴うときにはじめて真の信仰となるのである。

かくして、再生の完成したこの第六の状態——創造の六日目——を、スウェーデンボルグは以下のように要約している。

第六の状態は、人間が信仰から、ひいては愛から、真のことを語り、善いことを実行する状態である。彼がそのとき生み出すものは、「生きたもの」、「獣」とよばれている。そして彼は、そのとき信仰と愛とから、同時にまた信仰と愛とが共になったところから行動しはじめるため、「かたち」とよばれる霊的な人間になる<sup>36)</sup>。

以上が「創世記」第1章に内蔵された意味をスウェーデンボルグが解釈した内容の大略である。

## VI 創造の七日目とエデンの園の神話

「創世記」第2章には、いわゆる「エデンの園」が出てくる、一見ちがった視座からの人間の創造物語が続いている。聖書の高層批評はこの叙述のちがいを文献資料のちがいで説明する。まず第2章で使われる神名がよく問題にされる。第1章では神は「エローヘム」(Elohim)であるが<sup>37)</sup>、第2章の4節からは「ヤハウェ神」ないし「主なる神」(Jehovah-Elohim)という語が使われている。スウェーデンボルグはこれを、P典(祭司資料)とJ典(ヤハウェ資料)という二つの原資料が寄せ集

められて編集された結果使われた神名だとは考えない。しかし、このことは後述しよう。

さて第2章には、天地創造の七日目の記述が見られ、その後、ちりからの人間の創造とエデンの園の物語が続く。この一連の物語は、スウェーデンボルグによれば、「霊的人間から天的人間」への再生の究極的・最終的な過程を中心テーマとして扱っている。

これを理解するまえに、われわれは、人間の心ないし靈魂が四つの重層的なレベルで活動するというスウェーデンボルグの心理学や神学的前提を知らなければならない。四つのレベルとは「自然的」・「合理的」・「霊的」・「天的」(celestial)の各レベルであり、これらは人間の再生の度合に応じて順次「開かれる」、つまり意識化される。スウェーデンボルグは霊的な生命の内奥に天的な生命という高次のレベルを認めるが、これは西洋思想の伝統ではかなり特殊なケースである。「天的」という言葉は西洋の神秘主義においても余り使用されないからである。彼によれば、天的生命とは信仰の原理、すなわち真理の認知に関わるものではなく、愛の原理、すなわち善の意志や情愛に関わる。

六日目に再生過程を完了するとされる「霊的な人間」は、むしろ再生しているからにはそのうちに愛の原理は働いているものの、しかしそれはさほど多くはなく、ほとんどが信仰の原理に依拠して語り行動している。このことは、いわば良心に基づいて行動するようなもので、その場合には、まず正邪善悪の識別や判断という知性的な機能が働き、その後で、確認され確信された真理を意志し実行するといった性質が認められる。ところが「天的な人間」においては、天的な原理たる愛や善が第一位に立っている。彼は自分の愛や善の心情に分かちがたく刻印された真理から行動するために、その思考と意志とのあいだに分裂も抗争もなく、その行動はすべて自発的であり自由である。それはまさに、孔子が「己の欲するところにしたがって則を超えず」と言った境地であろう。

スウェーデンボルグは、自然的・霊的・天的

な、それぞれの人間の差違をこう述べている。

死んだ人間（再生していない自然的な人間——筆者註）は、争闘に置かれるとほとんどつねに敗北してしまうし、争闘に置かれな  
 ときは、もろもろの悪と虚偽とに支配されて  
 奴隷となる。彼を束縛するものは、法律への  
 恐怖や、生命・富・利得・名声を失うことへの  
 恐怖といった外なるものである。彼はこう  
 した生命・富・利得・名声をそれ自体として  
 尊んでいる。霊的な人間は、争闘の中に置か  
 れるが、つねに勝利する。彼を抑制する束縛  
 は内なるものであり、それは良心の束縛とよ  
 ばれる。天的な人間には争闘はない。彼は悪  
 や虚偽に襲われると、それらを軽蔑する。そ  
 のために彼は征服者とよばれる。彼がどんな  
 束縛によっても抑制されないのは明白であ  
 り、彼は自由である。外面には現われない彼の  
 束縛は、善と真理との認知である<sup>38)</sup>。

さて「創世記」第2章1節の「天と地と、そ  
 の万象とが完成した」は、六日目に「内なる人」  
 も「外なる人」も、その「万象」、つまり愛や  
 信仰から派生する知識とともに、霊的なものに  
 再生した、を意味する。2・3節の、創造の七  
 日目に神がすべての業を終えて休んだ、という  
 記述は、「天的な人間」への再生を意味する。  
 天的な人間には上に引用したように試練や葛藤  
 が停止してしまうために、「神がそのすべての  
 業から休まれた」と表現されるのである。なぜ  
 なら、スウェーデンボルグによれば、人間の再  
 生の全期間をとおして働くのは神であり、神は  
 虚無の暗闇の底にいた「自然的な人間」の再形  
 成、再創造のために不断に骨を折ったからであ  
 る。これがいわゆる安息日の起源である。

第4節で初めて神名が変化し、「神」  
 (Elohim) が「ヤハウェ神」(Jehovah-Elohim)  
 になる。「ヤハウェ神」が新たに使われる理由  
 を、スウェーデンボルグはこう説明する。すな  
 わち、「神」は「神的な真理」に関わる（——  
 それゆえ「霊的な人間」の再生に関わる）神を、

「ヤハウェ神」は「神的な愛」に関わる（——  
 それゆえ「天的な人間」の再生に関わる）神を、  
 それぞれ意味するからだという<sup>39)</sup>。古代の聖  
 書記者は、新たな再生過程の叙述のために、厳  
 密に神名を使い分け、叙述の形式も変えたので  
 ある。

聖書の高層批評はP典（祭司資料）とJ典  
 （ヤハウェ資料）という原資料の混在をここで  
 指摘し、「創世記」全体は、このほかにE典（エ  
 ロヒム資料）も加えた三つの原資料の寄せ集め  
 であるとしたが、本稿で概観してきたように、  
 もしそこに連続した意味のつながりが見出され  
 るならば、これは単なるバラバラの資料の寄せ  
 集めではなく、古代人の高度な知恵によって書  
 かれた宗教心理学的な一貫した論述と見做さね  
 ばならない。

さて、以下にエデンの園についての神話が続  
 くが、スウェーデンボルグによるこの神話の系  
 統だった解明を追ってみよう。

エデンの園の物語では、その「内なる・霊的  
 な意味」において、天的な状態へと向かう漸進  
 的な再生過程が扱われ、とくに天的なものを中  
 核とする、人間の靈魂に宿る生命の秩序が述べ  
 られる。

説明を明確にするために、第2章8節の、聖  
 書の本文の一部を下に引用しよう。

「エホバ神エデンの東の方に園を設て……」  
 （文語邦訳聖書）

「主なる神は東のかた、エデンに園を設けて  
 ……」

（口語邦訳聖書）

„Gott der Herr pflanzte einen Garten in  
 Eden gegen Osten hin...“

（ルターによる独訳聖書）

古来、聖書学者たちの詮索癖は、後述するエ  
 デンの園から流れ出る四つの川も含めて、それ  
 らが地上のどこにあったかを探らせた。一例を  
 あげれば、ヘボン博士の明治25年の聖書辞典を  
 見ると、エデンの園は何とアルメニアの山中に

あった、と書かれている<sup>40)</sup>。

ヘブライ語原典のみならずラテン語訳や英訳をも参照して徹底的に聖書を研究したスウェーデンボルグは、一つ一つの単語を原義に照らして厳密な釈義を展開した。その手法は、まず個々の語の霊的な意味を確定することから始められる。上に引用した箇所、彼による説明を聞こう。

「東」は太陽の昇る方向であり、神に関わるものを意味する。「エデン」は原義では「喜び」であるから愛に属するものを、「園」は理知つまり英知に属するものを、それぞれ意味する<sup>41)</sup>。一見、独断のようだが、彼は聖書の他の箇所のおびただしい同一の語と対照させて、これらの意味を確定している。このことを了解するために、「エデン」と「園」という語を取り上げている、『天界の秘密』100節のスウェーデンボルグ自身の言葉を引こう。

「園」は英知を「エデン」は愛を意味することもイザヤ書に見られる。

エホバはシオンを慰め、またそのすべて荒れたところを慰めて、その荒野をエデンのように、その砂漠をエホバの園のようにされる。こうして、その中に喜びと楽しみとがあり、告白と歌声とがある。(第51章3節)

この節では、「荒れたところ」・「喜び」・「告白」は、信仰の天的なもの、ないし愛に関わるものを表現する言葉だが、しかし「砂漠」・「楽しみ」・「歌声」は、信仰の霊的なもの、ないし理解力に属したものを表現する言葉である。前者は「エデン」に、後者は「園」に、それぞれ関わる。なぜなら預言書には同一の事柄について二つの表現が絶えず用いられ、その一つは天的なものを、他の一つは霊的なものを意味しているからである。

こうした個々の語の意味の確定と、原文の前後の文脈とから、スウェーデンボルグは「エデンの園」を、「神から愛をとおして流入する天的な人間の英知」と読むのである。

われわれが字義に拘泥し、聖書の節の中に、神が宇宙を造ったといった、ぼんやりとしたごく全般的な思想の表明しか見出せないなら、次に出てくるエデンの園の中央に植わっていた「命の木」と「善悪を知る木」が個々に何を意味するかわからないだろう。そこから、「善悪を知る木」は人間の性的関係を意味する、といった根拠のない解釈も生まれる。しかし前者は「愛と、愛に起源する信仰」を、後者は「感覚的なものから、すなわち単なる記憶の中の知識から得られる信仰」——それゆえそれは食べることを禁止された——を意味する<sup>42)</sup>。

「エデンの園」はまた四つの川の源流であった。ピソン、ギホン、ヒデケル、ユフラテがそれである。人はすぐに地誌的・歴史的なものに心を奪われがちで、霊的・宗教的な意味を読みとろうとしない。むしろ知識は、まず眼で見、耳で聴き、手に触れることのできる感覚をとおして得なくてはならない。だから古代人の宗教観念をアニミズムや呪術で説明しようとする考え方も、聖書がごくありふれた古代の神話の一つにすぎないという考え方も当然起こりうる。しかし聖書——とくに「聖言」を、あくまでも神のことば、神的啓示と考えるスウェーデンボルグは、自然や歴史に属する事物を抽象・捨象して、その事物を媒体として古代の聖書記者が語ろうとした宗教的な「意味の核心」に迫ろうとしたのである。今連続的に扱われている大きな主題は、人間の内なるものの再生、つまり本質的な意味での人間の創造なのだから、霊的な真理を求める者にとって、たとえばヨセフォス(Flavius Josephus)の『古代ユダヤ史』のような史学的考察や、フレイザーの『旧約聖書のフォークロア』のような比較宗教学的考察はこのさい余り役に立たない。

ところで、この四つの川のうち二つは、聖書そのものの他の諸節との対照によって、その地理的比定がはっきりしている。ユフラテはユーフラテス川、ヒデケルは「ダニエル書」中の節から傍証されるように、「アッシリアの東を流れる」ティグリス川である。ところがピソンと

ギホンをめぐる、さまざまな空想が飛びかった。ヨセフォスは、ピソンをガンジス川（これをインダス川と言う者もある）、ギホンをナイル川に比定して、全世界の水源が広大なエデンの園にあった、と空想した。しかしこうした推測は、ただの好奇心から出た詮索にすぎない。

それではスウェーデンボルグの解釈はどうなっているのだろうか。彼にしたがえば、「エデンから流れ出た川」は愛に発する知恵を意味し、「園を潤す」とは英知を与えることを意味する。そして「そこから分かれた四つの川」は、再生した人間の霊魂ないし心の四つのレベルを指している<sup>43)</sup>。人間の霊魂は神的な知恵ないし真理の働きを受容する四つの層に分けられ、各層は再生の過程で徐々に開かれることによって、霊魂全体が本来の秩序を復原する、というのが彼の神学を貫く根本主張である。それゆえ聖書のこの記述は、再創造された人間の霊魂がどのようにして神的な生命の完全な受容体として組織されるかを、その字義の奥に秘められた意味として描写しているのである。以下、聖書の本文と対照させて、その内なる意味を、彼にしたがって簡潔にまとめてみよう<sup>44)</sup>。

- ①「その第一の名はピソンといい、金のあるヘビラの全地をめぐるもので、その地の金は良く、またそこはブドラクと、しまめのうとを産した」(2:11-12)
- ②「第二の川の名はギホンといい、クシの全地をめぐるもの」(2:13)
- ③「第三の川の名はヒデケルといい、アッシリヤの東を流れるもの」(2:14)
- ④「第四の川はユフラテである」(2:14)

---

内なる意味、および補足

- ① 愛に発する信仰の英知として、神的な知恵ないし真理は、人間の心の「天的な度」の

領域内へ浸透し、そこに、もろもろの善や真理を生み出す。ここは、心の根源的な構成要素である「意志」に関する叙述。

- ② 心の「霊的な度」の領域内での、愛・信仰・善・真理に関わるあらゆるものの認知を意味する。この認知は①の「意志」とともに「内なる人」を構成する。この認知は、「内なる人」へ神的真理より浸透してくる、自分固有なものでない啓示的で超個人的な霊的知識と、「外なる人」に属する道徳的・社会的な知識とを識別する能力である。
- ③ 心の第三の度である「合理的な度」の領域内にある、理性の活動を意味する。この領域は「外なる人」に属するが、理性の明澄な視力が、「内なる人」から受容する神的真理によって、自らの下位にあるものを有機的に統合している。
- ④ 心の最外部・最低次の度である「自然的な度」の領域内にある、感覚や記憶に属したものを意味する。これは霊的なものを媒介している理性によって秩序づけられ生かされている。

さて、聖書では次に、エデンの園に生えていた、いわゆる「禁断の木の実」のなる「善悪を知る木」の話が出てくる<sup>45)</sup>。この箇所は、第3章から始まる、原罪を扱う人類の始祖の墮落論への序曲となっている。エデンの園の中央に生えているこの木は、先にも少し言及したが、感覚や記憶といった人間の心の度の最も外側、最も表層的な部分に由来する、信仰や信念のことである。そして、これは神によって食べることが禁止され、もしそれが食べられるなら人間は死ぬ、と言われたのである。

この木の意味の解釈と、第3章に出てくる、蛇にそそのかされてイヴがその実を食べ、それをアダムにも食べさせたという物語の解釈は、かの「原罪」の教説のルーツになったほど重要なものである。しかし本稿ではそうした議論に深入りせず、スウェーデンボルグによる解釈の要点を述べるにとどめよう。

禁断の木の実を食するという事は、要するに、感覚や記憶に属した「自然的な度」——そこには自己中心性や、世俗的なもののみを目的とする世俗愛が密着している——を、いわば一つの原理として心が支持するとき、生命の秩序の転倒、生命の逆流が起こり、人間の心が霊的・宗教的な意味で死んでしまう、ということである。スウェーデンボルグ自身の次の言葉は、この生命の秩序の転倒を的確に表現している。

世俗から賢明になろうとする者は、その者の「園」として、感覚と記憶的知識とに属したものをもっており、自己愛と世俗愛とが彼の「エデン」である。そして、その「東」は西、つまり自分自身である。彼の「ユフラテ川」は断罪された記憶的知識のすべてであり、「アッシリヤ」がある「第二の川」は虚偽を生み出す狂気の推論であり、「エチオピア」がある「第三の川」はそこから派生する悪と虚偽の原理であり、そうしたものが彼の信仰の知識となる。彼の「第四の川」はそこから派生する知恵であるが、それは聖言では「魔法」とよばれている<sup>46)</sup>。

## 結 論

以上見てきたように、スウェーデンボルグは、「創世記」冒頭の天地創成神話が、人類の古い時代より伝承された、霊的な人間の創造を扱う驚嘆すべき「再生の心理学」であることを解明したのである。ここではもはや、ユダヤ教とかキリスト教といった枠はずされてしまい、人類普遍の宗教的洞察の視座がすえられるのである。もし聖書が神的靈感によって書かれた高度な啓示だと主張しうる根拠があるなら、その根拠は、単なる因襲とか単なる教会の外的権威とかに求められてならない。それは、われわれ一人ひとりが理性に照らして不断に問い続けなければならないものである。

その意味において、科学者から転身した聖書

神学者、エマヌエル・スウェーデンボルグは、神秘主義者と世間で言われてはいるものの、その聖書解釈においては、聖書を理解・解釈する可能性の根拠を広く人間共通の理性に求めた一群の人びとの一人であった。しかし彼は、こうした「聖書を解釈する理性」(Ratio Scripturam interpretans)こそがすべての教理の判断の基準となるべきだ、と主張する、合理主義の立場にだけとどまったのではない。このことを詳論するためには、『天界の秘密』全巻にわたるさらに広範囲の考察が必要だが、それは本稿の意図ではない。それを後日の課題として本稿を閉じたいと思う。

## 註

- 1) Emanuel Swedenborg—A Continuing Vision, Robin Larsen 編, Swedenborg Foundation, New York, 1988.
- 2) 1988年8月24—27日に開催された「生誕300年記念シンポジウム」のテーマは「科学と霊性——統一への探求」(Science and Spirituality: A Search for Unity)であった。ここでの諸講演は *Chrysalis*, 1989年春号 (Swedenborg Foundation) に収録されている。
- 3) Swedenborg, *Arcana Coelestia* (以下AC. と略称) 5126番。以下、スウェーデンボルグの著作からの引用は、彼自身の付した小節の番号を示す。なお、英訳書は Swedenborg Foundation より刊行された standard edition, 1965を使用。
- 4) ユングがスウェーデンボルグの著作を熱心に学んだ事実については、次の二書を参照。H. F. Ellenberger, *The Discovery of the Conscious*, 1970, 邦訳書、木村・中井監訳「無意識の発見・下」(弘文堂, 1980) 298ページ。Howard Miller 編, *Tribute to Emanuel Swedenborg*, Boston, New Church Union, 1980, p. 6. なお後の著作で引用されているユングの言葉は以下のとおりである。「私はスウェーデンボルグを、偉大な科学者として、また同時に偉大な神秘家として称賛する。彼の生涯と業績はつねに私の大きな関心を惹いてきた。私は医学生時代の頃、彼の分厚い七巻の著作集を読んだのである」。
- 5) Alfred Acton, *An Introduction to the Word Ex-*

- plained*, Bryn Athyn, PA., 1927, 邦訳書, 拙訳, 『転身期のスウェーデンボリ』(未来社, 1987) 153—183ページを参照。
- 6) この遺稿は, Alfred Acton によって, 1928年から48年にかけて, *The Word Explained*, 全8巻として, Bryn Athyn の Academy of the New Church から出版された。
- 7) 彼によれば, 「聖言」は大別して四つの異なる文体で書かれた。それは, (1)最古代教会の文体(「創世記」第11章までの文体), (2)歴史的文体(アブラハムの物語以降のモーセ五書や, 「士師記」・「サムエル記」・「列王紀」などに見られるもの), (3)預言の文体(各預言書に見られる文体で最古代教会で大いに尊重された文体から派生したものの), (4)詩篇の文体(預言の文体と通常の文体との中間に位置するもの)である(AC. 66.)。
- 8) 出村 彰・宮谷宣史編, 『聖書解釈の歴史』(日本基督教団出版局, 1986) 30—31ページを参照。
- 9) 同書, 31ページを参照。
- 10) イマヌエル・カントの論文, *Was ist Aufklärung* (1784), 邦訳書, 篠田英雄訳, 『啓蒙とは何か』(岩波書店, 1950), 冒頭の「啓蒙」の定義。
- 11) 「創世記」第1章2節。以下, 聖書からの引用は日本聖書協会編の1955年改訳版に主としてしたがうが, 文脈によって自由に他の訳を採用することもある。
- 12) 前掲書 *Emanuel Swedenborg* の中に収められた Stephen Larsen の論文, *Swedenborg and the Visionary Tradition*, p. 190 を参照。トランスパーソナル心理学では, 神をこのように規定することがある。
- 13) 「マタイによる福音書」第23章37節。
- 14) AC. 19.
- 15) 「創世記」第1章4・5節。
- 16) AC. 8.
- 17) AC. 561.
- 18) 同。
- 19) 「創世記」第1章6—8節。訳はスウェーデンボルグのものにしたがう。
- 20) 拙論, 「スウェーデンボリの『合理的心理学』における自由意志論」(文化女子大学紀要, 第16集, 1985), 46ページを参照。
- 21) この「度」(degree) という概念はスウェーデンボルグ独自の概念で, 実在間の, 連続的ではない, 不連続的な階層的つながりを意味する。
- 22) Swedenborg, *Rational Psychology* (N. H. Rogers と A. Acton の英訳, Philadelphia, 1950) 134.
- 23) 「創世記」第1章9—13節。
- 24) AC. 29.
- 25) 同。
- 26) AC. 30(2).
- 27) 「創世記」第1章16節。
- 28) カルメル会の修道士だった彼は, 霊魂が信仰においてたどる変容過程を『カルメル山登攀』(奥村訳, ドン・ボスコ社)などの著作で系統だてて叙述している。そこでは, 変容の過程で霊魂がしばしば陥る, 信仰の「冷寒や乾燥」という試練の状態が語られる。
- 29) AC. 83.
- 30) 「創世記」第1章20—23節。
- 31) たとえば J. G. フレイザー (*Sir James George Frazer*) などの比較宗教学者は, 呪術→宗教→科学という図式によって人間の宗教心の発展を説明し, 原始宗教の本質は呪術であると考えが, スウェーデンボルグの原始宗教観はこうした見解に対立している。彼のそれは, イギリスの解剖学者・人類学者, G. エリオット・スミス 卿(*Sir Grafton, Elliot Smith*, 1871—1937)の学説や, 原始一神教を唱えたカトリックの神学者・民族学者, W. シュミット (*Wilhelm Schmidt*, 1868—1954)の考え方に近い, ということを指摘しておきたい。
- 32) 「創世記」第2章7節。「生霊」は文語訳聖書の訳語。英訳に living soul と訳すものが見られる。
- 33) 「創世記」第1章27節。
- 34) 「創世記」第1章26節。
- 35) AC. 54.
- 36) AC. 12.
- 37) 邦訳聖書は「神」と訳している。
- 38) AC. 81(3).
- 39) AC. 89.
- 40) J. C. Hepburn 編, 『聖書辞典』(ノーベル書房による復刻版, 1979), 99ページ参照。
- 41) AC, 98—99.
- 42) AC. 102—106.
- 43) AC. 78, 107—121.
- 44) 同。
- 45) 「創世記」第2章15—17節。

- 46) AC. 130. 引用文中の「エチオピア」は、「ク  
ン」がエチオピアと解釈されることがある事実に  
関係している。また第一～四の川の名が意図的に  
逆になっていることに注意。